

看護師と薬剤師との情報連携に関する実態調査

研究分担者 竹屋 泰 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 老年看護学 教授
研究協力者 糺屋 絵理子 大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 老年看護学 助教

研究用紙

本研究は、切れ目のないポリファーマシー対策の提供に向けて、薬剤師間および多職種との情報共有の仕組みおよびツールの整備を行うことを目的とした。研究分担者は、多職種のうち看護師に焦点を当て、薬剤師と看護師間の情報連携の実態や課題を実態調査にて明らかにし、効果的な情報共有ツール及びその活用ガイドの作成を行った。

昨年度（令和5年度）の実態調査では、自施設内での薬剤師との情報交換は9割以上と高い割合で実施されているものの、自施設外との連携は3割未満にとどまった。また、半数以上が薬剤に関する問い合わせに困った経験があり、多忙や接触機会の少なさが相談の障壁となっていた。連携手段については、電話が主流で、ICTの活用は限られている現状が明らかとなった。これらの結果を踏まえ、薬剤師間および看護師を含む多職種との円滑な情報共有を支援するためのガイド作成を行った。ガイドでは、看護師が薬剤師に提供する情報の特性や、連携における課題、看護師が求める情報の内容を踏まえ、入退院など療養環境が変化する場面において、どのような情報を共有すべきかを整理し、薬剤師と看護師間の円滑な連携に必要な視点を明示した。今後、現場で実装可能な実践的ツールとして、本ガイドの活用が期待される。

A. 研究目的

高齢者のポリファーマシーは、薬物有害事象や服薬アドヒアランス低下の要因となり、生活背景を踏まえた多職種による支援が重要とされている。中でも、看護師は患者の生活状況や服薬の実態を把握しており、薬剤師との情報共有が質の高い薬物療法に直結する。しかし、多忙な医療現場での情報連携には課題が多く、特に入退院など療養環境の変化において、効率的な連携体制の構築が求められる。本研究は、切れ目のないポリファーマシー対策の提供に向けて、薬剤師間および多職種との情報共有の仕組みおよびツールの整備を行うことを目的とした。中でも、研究分担者は、多職種のうち看

護師と薬剤師間の情報連携に焦点を当て、昨年度（令和5年度）の実態調査につづき、本年度は実践的ツールとしてのガイド作成を目的とし、研究を遂行した。

B. 研究方法

ガイドの開発：
多職種間の情報連携、とくに看護師と薬剤師の連携を支援するため、実態調査の結果を踏まえて情報提供ガイドを開発した。ガイドでは、療養環境の移行に伴い共有すべき情報や連携の視点を整理し、看護師が提供しやすく薬剤師が受け取りやすい内容とした。また、電話・FAX・ICTなど現場での運用を想定した手段も併せて提示し、実

実践的な活用を意図した。

(倫理面への配慮)

本研究は、国立長寿医療研究センターの倫理審査委員会の承認（受付番号：1671-2）を得て実施された。

C. 研究成果

ガイドで作成では、療養環境の移行期における多職種連携を支援するため、看護師と薬剤師の情報共有に焦点をあてた。また、看護師が薬剤師に提供すべき情報として、服薬状況、介助の有無、嚥下機能、生活環境や家族の支援状況などを明示し、薬剤師から共有されるべき薬物有害事象や薬剤の変更理由等の情報も整理した。また、連携手段として、電話・FAXに加えICT活用も提案し、日常業務の中でただちに実践しやすい内容となるよう構成し、最終的に薬物療法情報提供書、および薬物療法回答書を作成した。また、情報提供、および回答を策する際のガイドとして、「3. 高齢者総合機能評価 (CGA) とポリファーマシー対策 3) 認知機能」と「9.多職種連携の重要性 3) 看護師」のパートを作成した。

D. 考察

看護師と薬剤師の連携は、患者の安全な薬物療法を支援する上で重要であり、特に

入退院など療養環境の変化においては的確な情報共有が求められる。今回開発したガイドは、看護師が持つ生活情報と薬剤師の薬学的知見をつなぐ視点を明確にし、連携内容と方法を具体化することで、現場での実践を促すための活用が期待できる。

E. 結論

本研究では、薬剤に関わる多職種間の情報連携の実態と課題を明らかにし、療養環境の変化に対応した円滑な連携の重要性が示された。なかでも、看護師が有する生活に関する情報と薬剤師の専門的知見をつなぐ情報共有の視点を整理し、現場で活用可能なガイドを作成した。今後、本ガイドが多職種による協働の質を高め、ポリファーマシー対策の実効性を高める一助となることが期待される。

F. 研究発表

1. 論文発表：なし
2. 学会発表：なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得：なし
2. 実用新案登録：なし
3. その他：なし